ネットを扱うにあたって

氷上中学校　三年　荒木 絆

過去に一度だけ、匿名で「死ね」と送られてきたことがある。

たった一言のメッセージ。

しかしその言葉を見た直後、ひやりとした風が通り抜けた気がした。みぞおちをぶん殴られたような、内臓に冷たい氷を押し付けられたような感覚がした。

気付けば高圧電気にかけられたように全身を強張らせ、髪を両手で引っ掴んでいた。

死んでほしいと思われるほど、誰かの反感を買うようなことをした記憶はない。普段接する人とも程よい関係を築けていると思っていた。だからこそ、酷くショックを受けたことを覚えている。

さらに、自分は誰かに死ねと言わせてしまうほど不快な思いをさせている。それは判ったのに、肝心な相手が誰か判らないという状況が私を最も怖がらせた。

翌朝身が縮む思いで登校したとき、「おはよう」と挨拶してくれた友人に対し、最大限いつも通りを意識して、送り主がこの子でありませんようにと祈りながら「おはよう」と返した。友人はいつも通り笑っていたが、私はそのときの笑顔を信じられなかった。

別の友人と部活で会ったときは、目の前にいる彼女の好意的な態度はすべて演技で、心の内には私に憎悪の念を持っているのではないかと疑った。

話したことのない子に対しても目が合っただけで、あの子が昨日のメッセージを送ったのではないかと疑心暗鬼になった。

実名までは求めないものの、私に死ねと伝えることを目的に匿名のアカウントを使った者の傲慢、卑劣さは、己の内に潜むすべての醜いものを手掴みで取り出され、不快な匂いのする汚いそれを目の前に置かれたほどの衝撃で、実際に吐き気を催した。

「どれだけ善い人でいようと頑張っても誰かの人生では悪役になるのだから、匿名で送られてきた暴言など気にする必要は全くない。」

親はそう言ってなぐさめてくれた。

けれど気にしないようにすればするほど、頭はそのことでいっぱいになっていった。誰かに死んでほしいと思われている。あの子にかもしれない。いやあの人にかもしれないとひたすらに怯え、被害妄想をしていた。しばらくの間その思考を止められず、悲しいや怖いといった単語が頭の中をぐるぐると回っていた。

けれどメッセージの送り主にとって、あの言葉は惣菜屋に並んだ売れ残りのパックのように凡庸なものだったのかもしれない。爪を切るとか、卵を買い足す

といったような平凡な単語に過ぎない。だとしたら、悩んでいる時間は無駄なのだ。

多大なエネルギーを必要としたが自分にそう言い聞かせ、どうにか納得をつけた。

匿名の場合個人が特定されないため、プライバシーが保護されやすく、個人情報の流出リスクが低い。また、批判や反論を恐れずに意見を発信できていることから、発言への心理負担が少なく、多様な意見や体験談が集まりやすくなることなどがメリットとして挙げられる。

一方で、実名のときよりも気持ちが大きくなり、普段の自分には出来ないような過激で無礼な発言がしやすくなる。自覚しないまま、誹謗中傷の加害者になってしまうケースもあるだろう。その上情報源の特定が難しく、無責任な発言や荒らしに対して脆弱になるというデメリットもある。

スマホを持つことが当たり前になった今、私達は手軽に自分の意見を発信できるようになった。

しかしその分、簡単に人を傷付けられるようになってしまった。

一歩間違えれば、私も誰かを匿名で傷付けていたかもしれない。もしかしたら、これから傷付けてしまうかもしれない。

そうならないために私達が出来るのは、相手の人権を忘れないようにすることではないだろうか。自分に誰かを傷付ける権利はないことを常に頭の片隅に置いておく。そうすれば、自分と自分以外の人の心を守れる優しい社会を創れるはずだ。